知多半島丘陵部における タヌキモ科植物の現況について

磯 部 亮 一

東海地方三県下は、南方系の植物と北方系植物の接点といわれ、両系統の植物が互いに中継する地域でもある。3000mの高地から暖流ただよう海岸まで、特異な植物相が見られる。古くから植物学的研究がされ、広い範囲に、資料が温存されている。

とりわけ、食虫植物についても先駆者による採集記や論述が多く見受けられ、注目される所以である。たとえば、明治時代本草家の伊藤圭介が尾張乙川〔現半田市〕で、ナガバノイシモチソウ〔白花種〕を採集（図2）。名倉間一郎が三河で、ミカワタヌキモ〔現イトタヌキモ〕を採集。昭和になって、三重県金生水～大池での安井直康氏によるヒメミミカキグサ・コタヌキモ・ヒメタヌキモ等、多くの著述が見られる。

表題の半島は、それらの中心となる地域であり、筆者は近年〔1981～1985〕、日本福祉大学が、名古屋市から知多郡美浜町の丘陵地へ全面移転を機会に、予定地周辺を中心に半島各地を現地調査し、湿生、水生植物の実態をほぼ把握した。分類や同定の未了種もまだ残っているが、本稿では、水草に関連する食虫植物のタヌキモ類について、若干の知見を得たので、おもにその自生地を、概略であるが報告しておきたい。

当該地域は、名古屋市より南方へ約50km突き出た標高80m前後の丘陵性の半島である。西に伊勢湾、南東は三河湾に囲まれ、気候は温暖で、年平均気温は15.7～15.8℃、年間降水量は1,600～1,700mmとなっている。地質は、中央台地は旧洪積層、西南部は新第三紀層で、このうち南部は頁岩層をなしている。

各地に点在する遺跡は、古くから人間の居住地であったことを示している。それ故に人為的な影響が大きく、南部のウバメガシ純林以外は、二次的混生林となっている。谷間から沿岸部までは耕地として利用され、瀬戸内海地方と並ぶ溜池の多い地域であった。

伊勢湾台風〔1959〕以降、愛知用水、臨海工業地帯の造成、知多半島道路、名鉄新線、衣浦海底トンネル等の開通に伴ない農業基盤整備や宅地造成が大がかりに進み、地形や自然環境が大きく変貌しつつある。

前述した調査期間内に、確認できたタヌキモ科植物の自生地を表1～2に示し、整理してみた。確認年号末尾の丸印は、武豊町文化財保護委員長和田基己先生に同行し、現地確認した自生地である。このことから半島丘陵中南部で、タヌキモ科植物を欠く地区は、地質が異り池や河川の水が白く濁っている南知多地区及び、都市化が進み自然環境の変化が著しい半田市内である。

明治10年頃、伊藤圭介が日本国内で最初にナガバノイシモチソウを採集した半田市に隣接する武豊町内には、

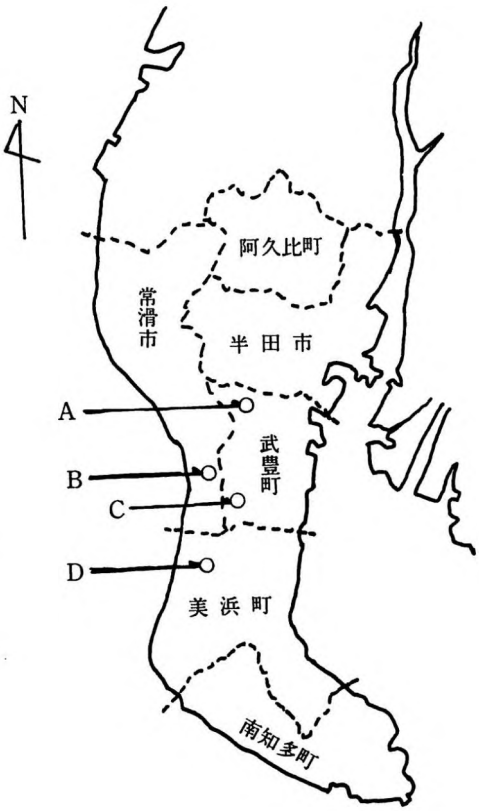


図1. 知多半島中南部市町位置図.
A. 壱町田湿地植物群落. B. 大谷浄水場. C. 別曽池. D. 日本福祉大学.

表 1. 知多半島中南部のタヌキモ類

(1981～1985)

	自生地区名	種　名	確認年時
Ⅰ	美浜町奥田	タヌキモ	1981
Ⅱ	美浜町奥田	イヌタヌキモ	1981
Ⅲ	美浜町奥田	イトタヌキモ	1981
Ⅳ	常滑市大谷	タヌキモ	1981
Ⅴ	常滑市大谷	タヌキモ	1981
Ⅵ	美浜町奥田	ノタヌキモ	1982
Ⅶ	美浜町河和	ノタヌキモ	1982
Ⅷ	武豊町市原	イトタヌキモ	1983 ○
Ⅸ	武豊町二ツ峰	ノタヌキモ	1983 ○
Ⅹ	阿久比町板山	タヌキモ	1984 ○
Ⅺ	美浜町河和	ノタヌキモ	1985 ○
Ⅻ	美浜町布土	タヌキモ	1985 ○
XIII	美浜町河和	タヌキモ	1985
XIV	美浜町上野間	タヌキモ	1985 ○

表 2. 知多半島中南部のミミカキグサ類

(1981～1985)

	自生地市町名	種　名	確認年時
Ⅰ	常滑市内	ミミカキグサ	1981
		ホザキノミミカキグサ	1981
		ムラサキミミカキグサ	1982
Ⅱ	阿久比町内	ミミカキグサ	1984 ○
		ホザキノミミカキグサ	1984 ○
		ムラサキミミカキグサ	1984 ○
Ⅲ	半田市内	――	――
Ⅳ	武豊町内	ミミカキグサ	1981
		ヒメミミカキグサ	1983 ○
		ホザキノミミカキグサ	1981
		ムラサキミミカキグサ	1983 ○
Ⅴ	美浜町内	ミミカキグサ	1981
		ホザキノミミカキグサ	1981
Ⅵ	南知多町内	――	――

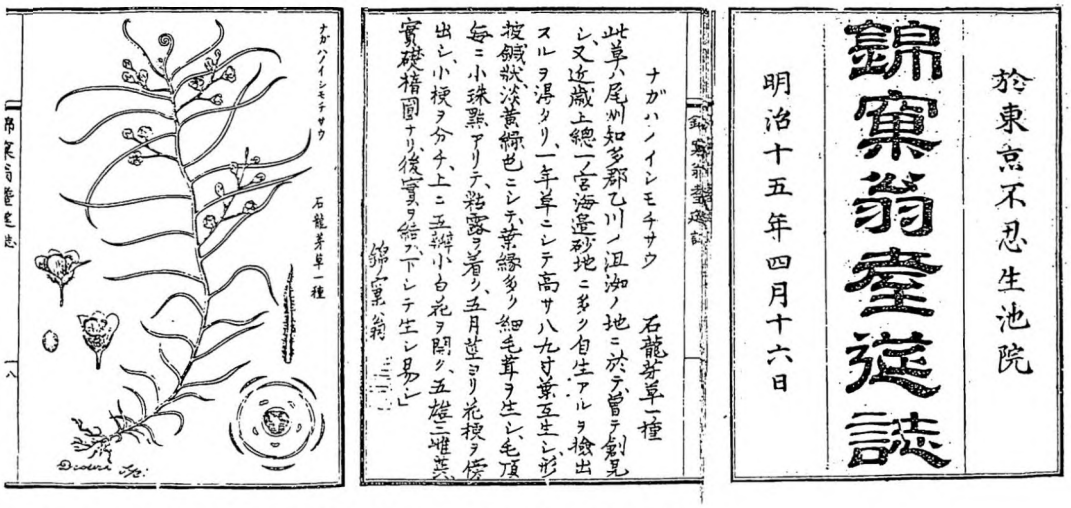
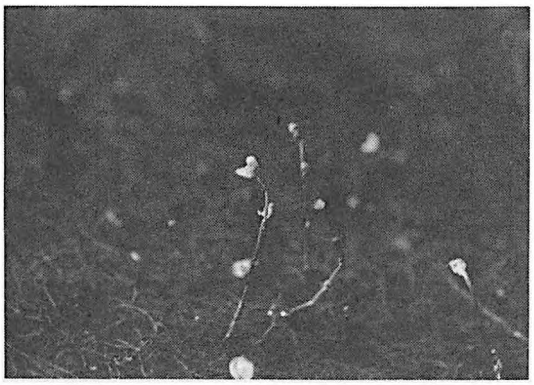


図2. 伊藤圭介『錦巣翁産延誌』の表紙とナガバノイシモチソウの解説

同種のシロバナナガバノイシモチソウが現存して、和田基己先生の御尽力と山本孝夫町長の植物に対する造詣と理解によって、ミミカキグサ類4種と共に、1984年3月「壱町田湿地植物群落」として、愛知県指定天然記念物となり、保存されることになった。

日本福祉大学移転地周辺は、谷間が深く最奥部には、大小の溜池が散在している。池の周りには酸性の湧水が所々にじみ出て、小さな湿地を形成してミミカキグサ・サワシロギク・サワヒヨドリ・ハルリンドウ・ホソバリンドウ・イシモチソウ・カキラン・コバノトンボソウ・ヤマトキソウ・ノハナショウブ・ショウジョウバカマ・ノギラン・ソクシンラン・ヒナノカンザシ・ゴマクサ等、半島内の湿生植物の代表的な種類がすべてみられる。この奥田から東方の河和地区丘陵地には、タヌキモ等の食



イトタヌキモ　武豊町市原上別曽の溜池で 1983. 8 撮影

ヒメミミカキグサ　武豊町北山壱町田湿地で 1983. 9 撮影

虫植物が多産して、酸性湧流水の豊富さを証明している。水田には、アカウキクサ・オオアカウキクサ・イチョウウキゴケ等も確認したが、徐々に環境変化が憂慮される地区である。

常滑市の大谷浄水場から、武豊町別曽池に至る丘陵付近には、ヒメコウホネ・ジュンサイ・ヒツジグサの優占する小さな溜池が、散在している。ジュンサイ優占池では、タヌキモの開花も観察した。1984年8月には、イトタヌキモ〔ミカワタヌキモ〕の自生池へ本会の杉浦正己・浜島繁隆両先生を御案内して、いろいろ御助言をいただいた。この付近には、シラタマホシクサの群生する湿地があって、ムラサキミミカキグサが混生して、両種共に知多半島におけるこの種の現在の南限地と思われる。

以上簡単に、筆者が現地で確認したタヌキモ科植物8種の現況について記述したが、在来種であるコタヌキモ・ヒメタヌキモ・フサタヌキモなど、北勢地方や三河豊橋方面に分布が知られているが、当該地域での生育は不可能であるらしく、確認することが出来なかった。半田市近郊の丘陵地で、外来種と思われるオオバナイトタヌキモ他を確認したが、これらの種は繁殖力の強いもので、今後在来種の生育に少なからず、影響するものと考えられる。

末筆になったが、いつも適切な御助言やら御指導をいただいている愛知学院大学の高木典雄教授ならびに市邨学園高蔵高校の浜島繁隆先生に厚くお礼申します。記して感謝の意としたい。

参 考 文 献

伊藤圭介. 1882. 錦巣翁産延誌.

杉浦正己・浜島繁隆. 1982. 国指定天然記念物. 小堤西池のカキツバタ群落. むかし・いま.

四日市市教育委員会. 1983. 国指定天然記念物. 御池沼沢植物群落環境整備事業報告書.

奥山春季. 1974. 採集・検索　日本植物ハンドブック. 八坂書房.

大滝末男. 1974. 水草の観察と研究. ニューサイエンス社.

浜島繁隆. 1979. 池沼植物の生態と観察.ニューサイエンス社.

浜島繁隆. 1971. 名古屋東部丘陵の保護すべき植物—都市近郊の自然破壊の実態—日本生物教育会第26回全国大会研究発表要旨1～5p.

浜島繁隆. 1977. 東海地方のため池とその植生. 地域社会 1 : 76－66.

浜島繁隆. 1979. 失われゆく滝の水（名古屋市）の小湿原. 植物と自然 13(12) : 56－57.

和田基己. 1984. 武豊町の植生. 愛知県武豊町.